

下る由を聞て、忽に舊き恨を忘れ新しき恩を施して候ひき、是れ偏に、彼が野心を挾まざりし故にあらずや、且又累代弓矢の家、此時に至りて、永く斷絶すべき事、誠に不便の至なり、只然るべくは、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばやと、折に觸れて、度々歎き奉りしかば、その事となく、年月を經て後に、本領をぞ賜ふたりける、

〔明良洪範<sup>十三</sup>〕寛文二年ニ、大坂御城代御吟味有シニ、近年松平丹波守光重、水野出羽守忠胤、内藤帶刀忠興三人ニテ、三年目交代ニテ勤ケルニ、此度酒井忠勝申上テ、古ノ如ク御城代ヲ定メ、其人ハ青山故伯耆守ノ嫡子因幡守宗俊然ルベシトテ、寛文三年ヨリ大坂御城代青山因幡守宗俊ニ定番仰付ラレ、因幡守早速大坂城へ移ラレケル、此時或人因幡守宗俊ニ告テ、此度貴殿大坂定御城代仰付ラレシハ、全ク酒井忠勝ガ推舉也ト云、因幡守宗俊是ヲ聞テ、早速酒井忠勝ガ牛込ノ山莊へ行キ、此度大坂定御城代貴殿御推舉ノ段、忝ク存ズル旨厚ク申述ケルニ、忠勝聞テ、我等左様ナル事一向存ジ申サズ、貴殿此度ノ事ハ、將軍家ノ御目鏡ニテ仰付ラレシ也、是ハ貴殿亡父伯耆守殿ノ忠勤ヲモ思召サレ、又貴殿ノ誠忠ヲモ思召サレテノ事ナルベシ、此上愈忠勤ヲハゲマレヨト云テ歸サレケル、故伯耆守ハ忠勝ヲ惡ミシニ、忠勝ハ却テ其子因幡守ヲ推舉シケル、恩ヲ仇デ返ス者ハ有ド、仇ヲ恩デ返ス者、此忠勝一人ナラント衆人感ジケルト也、

## 復讐

復讐トハ、君父等ノ人ニ殺サレシニ由リ、臣子等ノ、其仇ヲ殺シテ怨ヲ報ズルヲ云フ、世ニ之ヲカタキウチ、又アタウチト云フ、

本邦ノ俗、古來人情敦厚ニシテ、氣節ヲ尙ビシヲ以テ、復讐ノ事蹟尠カラズ、然レドモ復讐ニ